

北海道PSW協会ボランティアについて

日付	曜日	主催	内容	参加人数	活動内容	
12月	1	土	厚真町社協	スタードームに保管されている物資を小学校へ運ぶ作業など	5人	厚真町のスタードームに保管されている物資を、小学校に移す作業。今回は水を消費期限の期日が早い物から運び出した。スタードームから搬送する側と、搬入先の小学校側の2チームに分かれて作業を行った。取り壊す家屋内の清掃、家具や家電の運び出しを行った。取り壊すこともあり、家の中の全ての物を分別して破棄できるようにして欲しいと、家族より依頼があった。タンスや、冷蔵庫、割れたガラスや、絨毯などもはがした。
	2	日	厚真町社協	スタードームに保管されている物資を小学校へ運ぶ作業など	6人	厚真町ボランティアセンター活動の中で、町内の救援物資の保管場所の移設に伴い、スタードーム内の物資を廃校の体育館に運び込み、整理して積む作業に従事する。・飲料水 ・食品 ・毛布 ・家電製品 ・ストーブ などなど救援物資や避難所での生活物品
	8	土	厚真町社協	「厚真町スタードームチャリティイベント協力」	3人	取り壊し予定の大型家財(仏壇、冷凍ストッカー)を敷地内の倉庫へ移動。家から仮設住宅へ冷蔵庫、冷凍ストッカーを移動・設置。仮設住宅への段ボールベット搬入、組み立て。住民との懇談の中から、地震の時の様子やこれまでの暮らしの状況など聴取。
	9	日	厚真町社協	「厚真町スタードームチャリティイベント協力」	3人	チャリティーイベントへ協力
	15	土	レスキューストックヤード	むかわ町仮設「仮設住宅棚の取り付け&ランチ交流会」	2人	仮設住宅内の棚の取り付け(談話室での足湯・喫茶・ランチ交流会同時開催)。取り付ける棚の作成手伝い、片づけ・収納。ボランティアと住人宅訪問し、生活の様子を確認。昼食の炊き出しを各戸へ配布。
	16	日	レスキューストックヤード	ルーラルマナヴィハウス(厚真町)「第2回被災者の生活再建を考える無料相談会」	2人	2019/2/6に開催されるサロンイベント(あれこれサロン)のチラシ配布のポスティング、支物資(生活用品)の贈呈を含めた在宅訪問でのニーズ調査(生活環境調査、心身の問題の調査)。厚真町を地区ごとに分け、2人ないし3人1組で社会福祉協議会の車輛を使用し訪問。ニーズ調査ではチェックシート(外壁、基礎、風呂、トイレ、灯油、上水道)をもとに現状、対応状況、相談先を確認し、記載。義捐金の情報提供など必要に応じチラシを用いて簡単におこなった。本人の心身状態も訪問時に併せて確認。訪問終了後、ボランティアセンター担当者へ情報共有(留守等で訪問できなかった箇所、包括支援センターに繋がったほうが良いなどの意見等)。
1月	26	土	厚真町社協	全戸訪問	8人	100世帯全戸訪問。カフェデモンのチラシを配る際に生活環境(設備・建物被害など)、心身の問題などのニーズを調査。サロンのチラシ・チェックシート(ハード面の調査票)・お土産(生活用品など)・支援など説明チラシを持っていく。
2月	16	土	厚真町社協	全戸訪問	2人	厚真町の在宅生活世帯(仮設住宅はなく、初めての訪問)へ5グループに分かれて、地区別に戸別訪問を二人一組で実施した。住宅における修繕が必要な箇所の調査、住人との会話の中から、生活状況の確認、精神的・身体的要見守り者の掘り起こしなどトリアージを行った。訪問で得た情報を、主催者側と情報共有を行い、大工による修繕訪問、生活相談員による生活見守り者の確認を行った。
3月	16	土	厚真町社協	全戸訪問	7人	在宅訪問でのニーズ調査(生活環境、心身の問題の調査)。厚真町を地区ごとに分け、2人1組で持ち込み車両もしくは社会福祉協議会の車輛を使用して訪問。ニーズ調査ではチェックシート(外壁、基礎、風呂、トイレ、灯油、上水道等)をもとに現状、対応状況、相談先を確認し、記載。災害罹災証明の情報提供など必要に応じチラシを用いておこなった。本人の心身状態も訪問時に併せて確認。訪問終了後、ボランティアセンター担当者へ情報共有(留守等で訪問できなかった箇所、包括支援センターに繋がったほうが良いなどの意見等)。

## 現地で活動された会員からの感想まとめ

仮設住宅に入居されている世帯には既に厚真町の行政職員が積極的に関わっており、ボランティアではマンパワーの問題で職員が頻繁に訪問できないエリアを分担し訪問しました。総勢20名、10組のボランティアが今回自宅訪問を行いました。私達のペアは共栄地区を訪問しました。共栄地区は厚真町の下部に位置し、比較的地震の影響が少なかったエリアだと聞きました。10戸のご自宅を訪問し、9戸からお話を伺うことができました。どのご自宅も現在大きく困っていることはないと話し、早急に介入が必要だったり、情報が著しく不足しているといった印象は受けませんでした。それでも心労で3キロ痩せてしまった方や倒れてきたタンスに挟まれ肋骨を骨折し、全治3ヵ月と診断された方がいました。お二人ともご高齢の女性でした。その他にも軽度の認知症が疑われる単身生活の男性、地震をきっかけに自宅を立て直すことになった家族、倉庫が倒壊寸前になり、仮補修した状態のままの方など、様々な影響が出ていることは間違いありません。老老介護、住宅の老朽化など、もともと存在していた地域課題が地震の発生によって加速してしまった印象を受けました。2月にも大きな地震がありましたが、共栄地区に関しては本震よりはるかに揺れは小さく、特に影響はなかったとの声を聞くことができました。共栄地区の方たちは様々な被害を受けていますが、みなさん口を揃えて話されていたのが「こちら辺は全然ひどくはなかったよ、大体みんな一緒じゃないのかな?」「罹災証明は申請したけど、実際に保障されるのはもっとひどい人から…私たちは一部損壊だからね」と、ご自身で自宅を修復されたり、仮補修のままであったり、半ば保障をあきらめている方が多い印象でした。ボランティアが個別に訪問していることについて多くの方が好意的な印象を持たれていました。社会福祉協議会のスタッフにも、以前訪問した方から「この前ボランティアさんが来てくれたよ、いつもありがとうね」との声が届いているそうです。厚真町は人口が4千人、2千世帯が生活されています。今後も定期的なボランティア参加を行い、少しでも地域のニーズ把握、状況の確認のために貢献できればと感じました。

厚真町の地区ごとに戸別訪問を実施しましたが、予定戸数を訪問することはできず、翌日に持ち越すことになりました。私が訪問した地区は市街地周辺で、住宅状況は、「特に大丈夫です」言われるお宅が多かったですが、中には「建具がずれて戸が閉めづらくなった」「棚が壊れている」など業者に頼むまでもないが、自分ではできないという方が数世帯いました。また、「まだ片付けられていない部屋がある」世帯も多くあり、皆さん「温かくなってから」と言われていました。しかし、高齢者世帯や地震により怪我をしまい、後遺症が残っている方が多かったです。春先には片付けの人手が求められる印象でした。町内は工事車両が多く通行していました。その度に「家が揺れるので心が休まらない」と言われていました。生活状況や会話のやりとりの中で、要住宅修繕者、要見守り者を拾い上げ地域支援者に報告を行いました。留守世帯も多く、まだまだ確認しきれしていない。厚真町でも地区(部落)ごとにニーズが異なるかもしれない。

雪解けの春先には、片付けの再開、地震による農地への土砂被害、農器具損壊の影響など、まだまだ問題は片付いていない印象を受けました。私自身、初めての活動でしたが、突然の訪問にも関わらず、「ごくろうさま」と声を掛けられ、家に上がるように招き入れてもらったお宅や色々とお話をしてくださったお宅など温かく迎え入れてくれました(中には、「結構です」と返されたお宅もありましたが…)。訪問時間は短時間であり、生活状況もわからない中での訪問調査は、難しい部分もありましたが、ひとつひとつの言葉の想い、表情など、インタビュー面接の応用や訪問看護、精神疾患への対応など精神保健福祉士として普段の業務を活かせる部分もあると思いました。

担当した地域が、町はずれに向かう横長(縦長?)の農家を営む家の多いエリアでした。2~5軒が固まっているエリアもありますが、概ね隣との距離がかなり空いている(一番奥は隣と2キロと言っていました)地域です。住宅については概ね「修理は終わった」と語られますが、今の時期になって「隙間風」や「水漏れ」がみられる所もあるようです。また、外れの地域では井戸水が使用できなくなり、町の水道の本管が届いていない家では、個人で苦小牧から水を運んで来ている事、水道本管が届いている場所でも引き込みに1万円/mを個人負担しなくてはならず、経済的負担が大きいと述べていました。また、土砂が流入した畑や放牧地を抱えている農家の方々も、「自分達でやるしかない」という諦めと怒りに近い感情も抱えているようです。しかし、年齢層が高い事もあり「仕方ないね」「戦争を超えて来ているから、大したことないよ」と口にされる方も少なくありませんでした。(おひとり、精神症状用の発言がみられていましたが、10年前からの状態とのことで、不眠や幻聴・幻視を言葉にしますが日常生活に支障をきたしてはず、同居の夫も困っていないこともあるため、「現状下では問題なし」と判断した方もいました。被災とは関係なく、「地域で暮らす」ことを見せていただいた訪問先でした。

美里地区の在宅訪問をさせていただきました。一軒一軒の距離が離れている箇所もあり、中には単身生活者もいたため孤立していないか等の定期的な安否確認があれば良いのではと思います。地図に載っていない場所に住宅があり、生活していた方がいたため、他に地図に登録されていない住宅がないかの確認も必要だと感じます。「ボランティアセンターです」と名乗り、訪問しましたが、多くの方からは「いつもありがとう、ご苦労様」と言葉をいただき、町内でボランティア活動の認知度高まってきていると感じました。一方で、一部住民の方から生活状況などの調査に対し、最初は『不審感?』を感じている場面もあったため、配慮や自分たちの資格や身分を証明するものがあれば少し安心してお話くださるのではと思いました。実際に調査をしていくと壁にひびが入っていたり、一部基礎がむき出しになっている状態で生活をしている現状があります。部屋内部や水道は修繕し、最低限の整備は冬前に間に合ったようですが外壁等全て修繕を終えている住宅は少ない印象でした。また、自宅の横の山が崩れ土嚢を積んでいる箇所、農家の宅では地震の影響で畑に使う水が止まっていたり、地割れ部分に雪を埋めて道として使っている等、整備が進んでおらず、その見通しも行政からの連絡もないため、雪解け後・春以降のこれからの対し不安を感じている方もいました。「まわりも同じ状況だから…」とお願いしづらいと感じているようです。住民の方々も不安を口にされていた通り、今後春先に様々な問題が浮上していく可能性があるため、継続して情報収集、調査、アセスメントの必要性があると感じました。

- ①全国各地からのボランティア参加者が多いことに感謝の気持ちを持った。
- ②中学生や還暦を超えた参加者の前向きな取り組みに、励まされたと同時に、和やかな雰囲気でも活動できた。
- ③pswとして何が出来るか、と考えながら参加しましたが、まずは人員として貢献できることに従事した。

ボランティアは予想以上に熱量があった。時間が経過しているが、参加している方はとても熱意があるように感じた。ソーシャルワーカーの本質を考えた時に無償の活動に自分が参加出来たことが、表現がわからないけれど嬉しかった。